

苦勞の末できたお金

沖縄県・浦添市立浦西中学校 3年 益田 菜月

私の家は、決してお金に余裕があるわけではありません。私のお小遣いは他の人に比べると少し少なく感じ、友達が欲しい物を何のためらいも無く買っている様子を見ると、不満で堪らなく、何度も文句を言っていた様な気がします。

私の両親は、昼屋をされていて共働きです。そして、私が幼い頃から両親はずっと忙しくしていました。ですから、何回か祖母の家に預けられた時もありましたし、忙しくて家に帰る暇をも惜しむ時は、両親の仕事場で何日も泊まっていた事もあります。ですからその時、何度も両親の働いている姿を見てきました。今でもその時の光景が鮮明に思い出せる程、目に焼き付いています。

しかし、あの頃の私は、それが普通なんだと思っていました。両親が働くのは当たり前で、自分がお金をもらえるのも当たり前なのに、どうして少ししかもらえないんだ、と今思い出せば本当に傲慢で思い上がった人間でした。

あの出来事があった日も、私は本当にわがままでした。母の家事を手伝いながら、めんどくさいと文句ばかり言っていました。すると、母が遂に怒り出しました。そして激しく泣き出したのです。私には、最初何が起きているのかさっぱり理解できませんでした。母はまるで泣きたくないのに溢れ出す感情を我慢出来ないともいう様に体を震わせ、声はかかれて裏返っていました。そしてその時、私は初めて知ったのです。

今の時代、昼を必要としている人はそう多くありません。それでも両親は、普通は売らないという様な値段まで下げて何とか仕事をしていたのです。私は、夏に暑そうに汗を流して働いている姿や、何階もあるアパートの最上階へ昼を配達するために、昼を持って何度も上り下りしている姿を見ていました。そして朝から仕事をして夕方帰ってきた後、更に母は毎日家事をしていました。しかし、私は見てただけで、何も協力しませんでした。家事を少し手伝っていたと言っても、あんなに何度も文句を言いながらやられても、苦痛でしかなかったでしょう。私は、両親が限界になるまで働いてからしか、両親の苦しさに気付くませんでした。両親だって、感情があって、私の親である前に一人のかけがえのない人間なんだとそんな当たり前の事に気付けていなかったのです。

そしてある日、私が中学生になり、塾へ行かせて下さいと頼みました。すると、とても高い授業料だと知った上ですぐに賛成してくれたのです。私はとても驚

きました。塾へ行かなくても学校で勉強はできると言われると思っていたからです。しかし両親は、学校では足りない分もあるだろうからと、私の将来の事を考えた上で協力してくれたのです。この時私は、両親がここまでして頑張ってきたのは、私の将来の事をきちんと考えてくれていたからなんだと、やっと気付きました。自分の夢をこんなにも応援してくれる親の温かさと大らかさに触れ、これ以上ないくらいに安心しました。

そして、確かにあまり欲しい物をたくさんは買えなかったけれど、将来の夢を自分で選択する事の出来る素晴らしさを知り、その事の方が大切なのだと気付きました。そして、あまりお金を与えていなかったのも、無駄遣いをする人間にはならない様にするためでもあり、今後の事を考えてくれていたのだと分かりました。自分達の苦勞もかえりみずに人のために汗水流して働いた両親を心の底から尊敬しました。そして、この幸せが当たり前にあるのではなく、両親が精一杯作ってくれた物で、感謝する事が大切なのだという事も気付く事が出来ました。

今回の事で、目先の事に捕らわれず本当に大切な物を見極めて、お金を使っていく事の大切さを知り、お金がどのようにして自分の元へ来たのか、両親がどれだけの苦勞をした結果このお金があるのだという事をずっと心に留めておこうと思いました。今まで両親に負担をかけ過ぎていた分も家族で協力していき、お金の使い方を確実に認識していこうと思います。大変だと思うけど、家族で協力して、より生きたお金の使い方をしていけたらと思います。

